

研究紀要

第21号

黒曜石製石器の产地推定とその様相について
—雅楽谷遺跡と周辺遺跡—

上野真由美 望月明彦

池上・小畠田遺跡の土壙について
—その配置と性格を中心にして—

宅間清公

旧入間用水系下流域の周溝墓と周溝（上）

福田 聖

坂塚古墳群の様相

山本 稔

古墳時代の河川交易
—下田町遺跡へ貝を運んだ道—

赤熊浩一

中世渡来銭にみられる所謂星形孔銭の検討
—北宋の貨幣政策と銭貨化学組成の変動—

清水慎也

中世～近世の地鎮について（下）
—墨書き土器を用いる例を中心として—

鈴木孝之

図書の分類と整理について
—文献データベースの作成—

新屋雅明 金井義直

蓮田周辺採集大珠の鉱物分析

大屋道則

北本市内出土石製品の鉱物分析

磯野治司 斎藤成元 清水慎也 大屋道則

埼玉県内河用砂の鉱物組成について
—胎土分析に関する基礎資料—

大屋道則 清水慎也 横山一己

石器材料及び石器の理化学的分析値（1）
—XRFによる黒曜岩分析値（2005年度）—

大屋道則 西井幸雄 上野真由美 亀田直美
国武貢克 島立桂 田村 隆 望月明彦

2006

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団





2 clinochlore talc



4 talc



3 clinochlore talc



20 talc



12 clinochlore muscovite



8 quartz muscovite



14 clinochlore



19 quartz celadonite



1 clinochlore



16 augite





13 omphacite



11 jadeite



17 tremolite



6 tremolite



10 jadeite



7 tremolite



18 tremolite



5 tremolite



15 tremolite



9 tremolite



目 次

序

- 黒曜石製石器の产地推定とその様相について 上野真由美 望月明彦 (1)
－雅楽谷遺跡と周辺遺跡－
- 池上・小敷田遺跡の土壤について 宅間清公 (35)
－その配置と性格を中心に－
- 旧入間川水系下流域の周溝墓と周溝（上） 福田 聖 (51)
- 飯塚古墳群の様相 山本 穎 (85)
- 古墳時代の河川交易 赤熊浩一 (91)
－下田町遺跡へ貝を運んだ道－
- 中世渡来銭にみられる所謂星形孔銭の検討 清水慎也 (109)
－北宋の貨幣政策と銭貨化学組成の変動－
- 中世～近世の地鎮について（下） 鈴木孝之 (145)
－墨書き土器を用いる例を中心として－
- 図書の分類と整理について 新屋雅明 金井義直 (171)
－文献データベースの作成－
- 蓮田周辺採集大珠の鉱物分析 大屋道則 (183)
- 北本市内出土石製品の鉱物分析 磯野治司 斎藤成元 (185)
清水慎也 大屋道則
- 埼玉県内河川砂の鉱物組成について 大屋道則 清水慎也 (191)
－胎土分析に関する基礎資料－ 横山一己
- 石器材料及び石器の理化学的分析値（1） (199)
－XRFによる黒曜岩分析値（2005年度）－
大屋道則 西井幸雄 上野真由美 亀田直美
国武貞克 島立 桂 田村 隆 望月明彦

池上・小敷田遺跡の土壌について

—その配置と性格を中心に—

宅間清公

要旨 関東地方における弥生時代墓制の研究は、従来再葬墓、方形周溝墓が主としておこなわれてきた。再葬墓に関してはその特異性から、方形周溝墓は西日本との関係及び後続する古墳時代への連続性などから議論されてきた。一方土壌墓に関しては、認識の難しさもあり、議論は余りなされていなかった。本論は、自然堤防上に築かれた本格的な弥生集落である池上・小敷田遺跡の土壌を検討し、その性格について考えるものである。はじめに、集落内における土壌の配置状況について河川跡により区切られた地区ごとに検討し、土壌の配置状況の共通点と相違点を確認した。その後、土壌の平面形態を中心に分類を行い、その性格を土壌墓と推測した。また、池上・小敷田遺跡では、墓域と住居域の未分化と萌芽的な墓域の分化が認められた。最後に、これらの特徴を周辺遺跡との比較し、その意義づけを行う。

1. はじめに

従来、関東地方の弥生時代中期の研究は資料不足のためか、土器研究に偏ってきたきらいがある。しかし、現在多くの遺跡が調査される中で、土器細別研究以外にも、水田跡を通した生産の問題や方形周溝墓などの墓制の研究も進みつつある。ただし、これら的一部に特化あるいは深化した研究だけであると、どうしてもが面一的な解釈に陥ってしまう危険がある。より豊かな地域性や時代的な特徴を示すには上に挙げた以外の研究や既存の資料を新たな視点から見直すことが必要であろう。

池上・小敷田遺跡を改めて検討することはこれらの視点からも不可欠であろう。出土土器については多くの人により検討され、池上式の名称も定着してきている。さらに、池上式に後続する土器群である北島式も提唱され、その連続性なども検討されている（吉田2003）。また、遺跡からは、東北地方の南御山2式、北陸地方の小松式などを遠隔地の土器を始め、各地から持ち込まれた土器が出土している。関東地方の土器型式の併行関係だけでなく、遠く東日本の土器型式の併行関係を考える上で大きく寄与し

ている。

しかし当然ながら土器以外の検討、即ち遺構の検討も必要であろう。それは、池上・小敷田遺跡を、関東地方あるいは東日本の中でどのように意義づけるかの問題に関わる重要な事柄であると思われる。遺構の配置や性格をどのように考えるかによってその遺跡の意義づけは大きく変わるであろう。

小敷田遺跡の土壌についてはすでに、金子彰之・坂本和俊氏により、県内の弥生時代の墓制を検討する中で、土壌墓（再葬墓）の可能性が指摘され、更なる検討の必要性が説かれている（金子1988・坂本1988）。しかし、その後積極的に議論は行われていないようである。これは、土壌墓が再葬墓や方形周溝墓に比べ認識しづらいことも原因の一つであろう。

ここでは、池上・小敷田遺跡の土壌を取り上げ、検討を試みる。

それに先立ち、池上・小敷田遺跡の立地や今までの見解について見て行きたい。

2. 遺跡の概要（第1図）

池上・小敷田遺跡は、埼玉県北部の行田市及び熊谷市に位置している。周辺は、荒川及び利根川の氾

溢により形成された自然堤防が数多く存在する。池上・小敷田遺跡もこれらの自然堤防上に立地している。調査は、池上遺跡・池上西遺跡・小敷田遺跡に分けて行われている(中島1984、宮1983、吉田1991)。特に一般国道17号線バイパス事業に先立ち行われた小敷田遺跡は北西から南東方向に長い調査区になってしまっており、集落を縦断する形で調査が行われた。

現在、遺跡周辺は水田地帯であり平坦な地形が広がっているが、弥生時代当時は、蛇行する自然流路と、これらにより形作られた自然堤防と後背湿地が複雑に入り組んでいたと考えられる。実際に小敷田遺跡では自然流路跡が4箇所で検出された。周辺の自然堤防上には、堰跡を検出した北島遺跡(吉田2003)をはじめ、古宮遺跡(鈴木2004)、前中西遺跡(吉野2002・03)、諏訪木遺跡(吉野2001)、平戸遺跡(栗原1976)など弥生時代中期中葉から後期にかけての遺跡が集中している。

池上・小敷田遺跡は、蛇行する河川の両岸を中心には住居域と墓域が営まれた集落遺跡である(註1)。従来、関東地方では弥生時代中期の遺跡は台地上の調査が中心であり、低湿地の調査はあまり例がなかった。現在では、埼玉県北島遺跡、神奈川県中里遺跡(呉地・河合1997)、千葉県常代遺跡(甲斐1996)など当該期の大規模な遺跡が相次いで低地から発見されている。これらの遺跡は、低地という特性から、木製品をはじめとする豊富な遺物が出土し、それぞれの地域における拠点的な遺跡であることが分かれている。また、他地域からもたらされた遺物も多く出土し、広範な地域と交流が見受けられるのも特徴的である。

池上・小敷田遺跡はこれらの遺跡に先立ち調査が行われたことから、その後の低湿遺跡調査の先駆けとなったものである。水田等の生産域こそ未発見であるが、住居域と墓域が調査されたことから、関東

地方中期中葉の集落構造を理解する上で欠くことのできない遺跡である(註2)。

特に、新來の墓制である方形周溝墓の検出は、從来再葬墓一辺倒に考えられていた関東地方の弥生時代中期中葉のイメージを一変させたと言ってよい。現在では中里遺跡、常代遺跡と共に関東地方最古の方形周溝墓として位置づけられている(福田2004)。

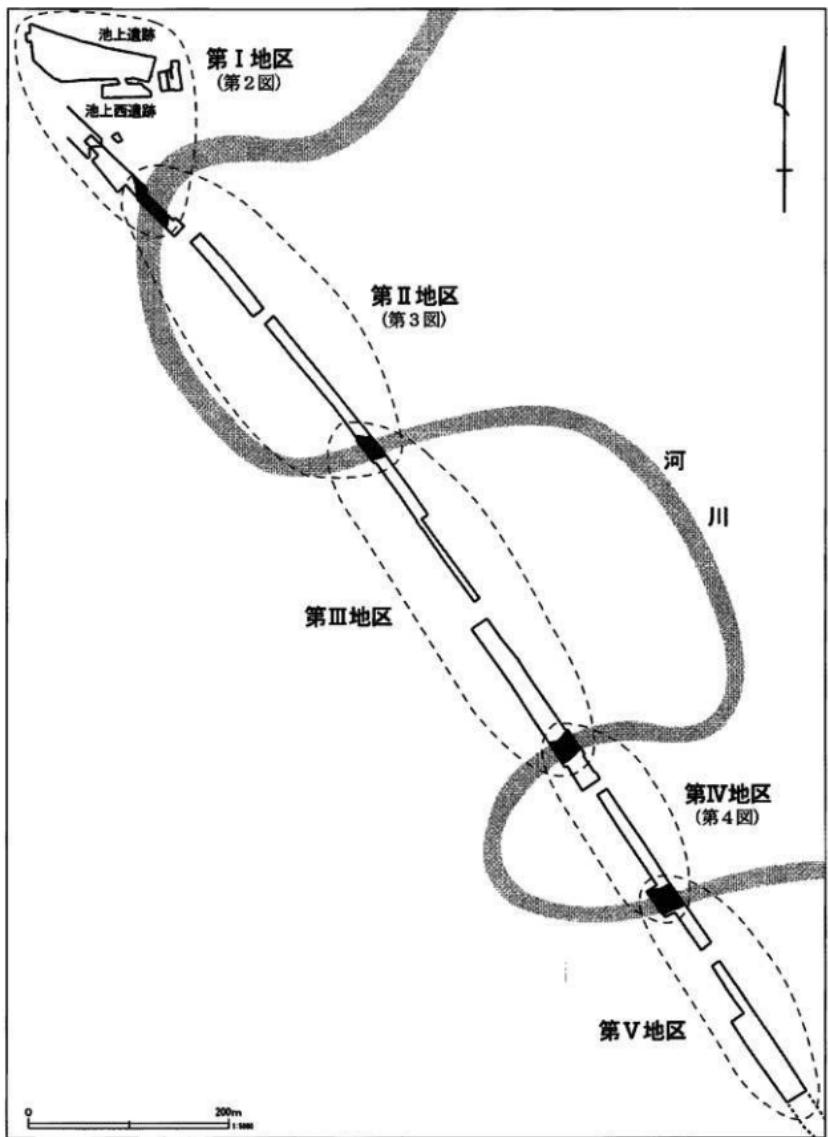
以上見てきたように、小敷田遺跡の調査は、その後の研究の大きな呼び水になった。しかし、その一方で、方形周溝墓などの存在が目立ちすぎ、西日本と関わりが強調されすぎ、平板的な理解になってしまふことも否めない。

本論では、土壤を検討することにより、池上・小敷田遺跡の理解の一助としたい。土壤の分析にあたり、弥生時代の遺構がどのように配置されているかを知ることは重要である。ここでは池上・小敷田遺跡を以下のように第Ⅰ～Ⅴ地区に分け遺構の概要について見ていくたい。地区区分については調査区内4箇所において検出された河川跡を基準に区分した。これは、自然地形が遺構の配置に規制を働くと考えたからである。

3. 各地区的概要

第Ⅰ地区(第2図)

第Ⅰ地区は小敷田遺跡1区・池上遺跡・池上西遺跡地区を合わせた範囲である。住居跡13軒、方形周溝墓3基、土壤37基、溝跡3条が検出されている。第1号環濠と報告された溝跡の東側から9軒の住居跡と土壤が34基検出されている。第7・8・9号住居跡のように重複も見られ、ある程度の時間幅があり、同じ場所に継続して住んでいたことが分かる。土壤はこれらの住居跡に挟まれるように分布している。第1号住居跡より南側には1基しか検出されていないことからほぼ分布範囲が分かる。住居跡との



第1図 池上・小敷田遺跡全体図

切り合いも認められる。第4号住居跡北側と第6号住居跡の南側の2箇所に土壌が纏まって認められるが、極端な集中ではない。第6号住居跡南側の土壤群は土器捨て場を伴う第22号土壌など特異なあり方をしている。

第1号環濠と第2号環濠に囲まれた部分からは住居跡2軒と土壌が1基検出されている。全体的に遺構の分布が粗である。第2号環濠の西側では弥生時代中期の遺構は確認されていない。のことから、第2号環濠は住居域の西端を画する溝と考えられる。

小敷田遺跡の調査範囲である第3号溝跡の南側では、住居跡2軒、土壌2基、方形周溝墓3基が検出されている。二軒の住居跡は35mほど離れていて、住居規模は違うが、主軸（長軸）方向は同一に近い。

方形周溝墓は四隅が切れるタイプで、お互いに溝を共有して作られてことから、多少の時間幅があろうが同一計画のもとに作られたと考えられる。主軸方向は住居跡とは違う。また、第2号住居跡は第3号方形周溝墓の方台部上にあることからも住居跡と方形周溝墓との間に時間差があることが分かるであろう。ここでは住居跡が古く、方形周溝墓が新しいととらえておきたい。

土壌は、第1号住居跡と第1号方形周溝墓の間に2基が認められる。今回は分析対象からは省いたが、第3号方形周溝墓と河川跡の間にも時期不明の土壌が認められる。遺物が出土していないことから時期不明としているようだが、小敷田遺跡1区では、他時期の遺構は井戸を除き検出されておらず、僅かに包含層中から古代の遺物が検出されるのみである。のことからも弥生時代に属する可能性が高い。

この土壌と方形周溝墓に関しては、春成秀爾氏が時期不明とされた土壌も含めて、考察している。春成氏によれば、方形周溝墓の溝底が土壌状の壅み、そこから完形の壺が直立あるいは横倒した状態で出

土しており、その出土状況が再葬墓に近いことから、溝内に再葬されたものと考え、土壌も同様に再葬墓ととらえている（春成1993）。

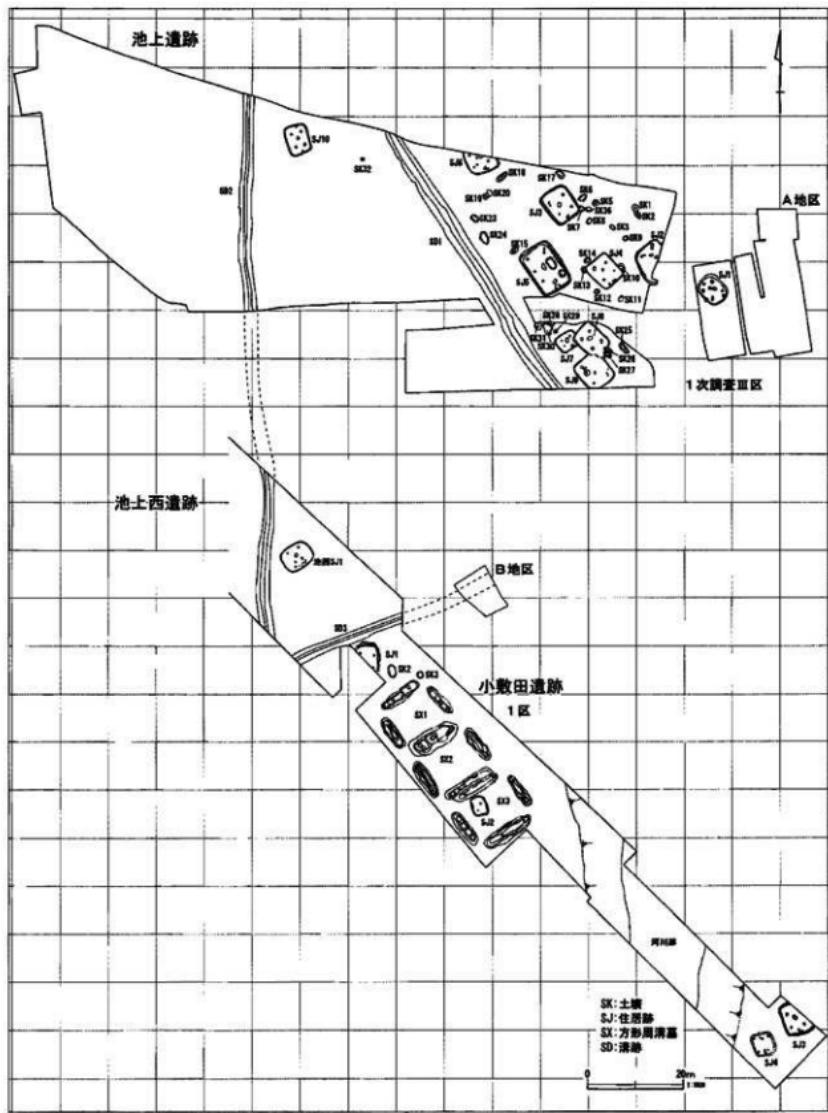
いずれにせよ、第I地区は、住居跡と土壌が混生する箇所と遺構も少なく住居が僅かに散見される場所とに分けることができる。また、小敷田遺跡部分のように方形周溝墓と住居跡に時期差があるにせよ、溝などで区画することなく住居域と墓域が未分化に存在することが特徴的である。

第II地区（第3図）

第II地区は小敷田遺跡1区河川跡南側から、2区の全域、3区河川跡北側までの範囲とする。前述のようの道路工事に伴う調査の関係から北西から南東に長い調査区になっている。全長はおよそ300mである。検出された遺構は住居跡9軒、土壌76基である。

地区の設定に当たっては前述のように、河川跡で区画される範囲を大きく一つの区として認識した。第II地区的遺構の分布の特徴を見るとこの河川跡を中心にして遺構が営まれている。また、河川跡から離れば離れるほど遺構の分布は粗になっていく。このことから、第II地区では遺構の分布の集中が二箇所で認められる。ここでは、第26号土壌と第28号土壌の間に無遺構地帯が認められることから、ここをこの地区を二つに分ける基準とし、北側を第II地区北遺構群、南側を第II地区南遺構群と呼びわけ、その特徴を見ていく。

北遺構群では、住居跡4軒と土壌が17基検出されている。遺構同士には重複は認められない。土壌は第5号住居跡と第6号住居跡の間にやや纏まってみとめられる。第6号住居跡の南側にも土壌が点在する。第I地区的池上遺跡第6号住居跡の南側の状況に似ている。ただし、土器捨て場などは伴わないようである。



第2図 第I地区全体図

南遺構群は小敷田遺跡で最も遺跡分布の密度が高いところである。住居跡が5軒、土壙が60基検出されている。遺構には多少の重複が見られるところが北遺跡群とは違う点である。またやや細かく見てみると、住居跡と土壙が分布する場所と土壙のみが分布する場所が見られる。住居跡と土壙が分布するところでは、第11号住居跡と河川跡の間に代表されようとして土壙の濃密な分布が認められる。ただし、第I地区の池上遺跡第7・8・9号住居跡周辺のように見られたように住居跡と土壙の重複は、第9号住居跡と第70号土壙以外に認められない。

土壙のみが分布する場所は第7・9号住居跡より北側の部分をさす。ここは後に詳しく見るが、管玉の出土した第44・77号土壙や骨片が出土した第54号土壙、赤色顔料が検出された第65号土壙などが存在する。第42号土壙付近までは土壙は密に分布しているが、それより北はやや希薄になる。

調査範囲は限定されるため推定の域を出ないが南遺構群は小敷田遺跡の中で主体をなす地域である。前述のように、細かくみると住居跡と土壙、土壙のみの場所（その中にも密度の差が見られる）に分けることができるが、大きく見ると第I地区の第1号環濠の東側の状況と似ている。相違点としては、第1号環濠東側が環濠により遺構の分布範囲を画しているが、ここでは、溝による区画は伴わない。南側は、河川跡により区画され、北側は土壙の分布が徐々に希薄になるようにして、分布域が終わることが特徴的である。

北遺跡群と南遺跡群とでは検出された住居跡の数にさほどの違いは見られないが、土壙の数には大きな違いが認められる。ただし、住居跡周辺から検出される土壙群に限ればその差は埋まる。つまり南遺構群でも第7号住居跡と第8号住居跡とを結んだラインより南に限れば、土壙数は21基であり北遺構群

の17基に近い数である。

同地区では遺構が集中する箇所であるにもかかわらず、方形周溝墓も未検出であることも注目されることである。

第三地区

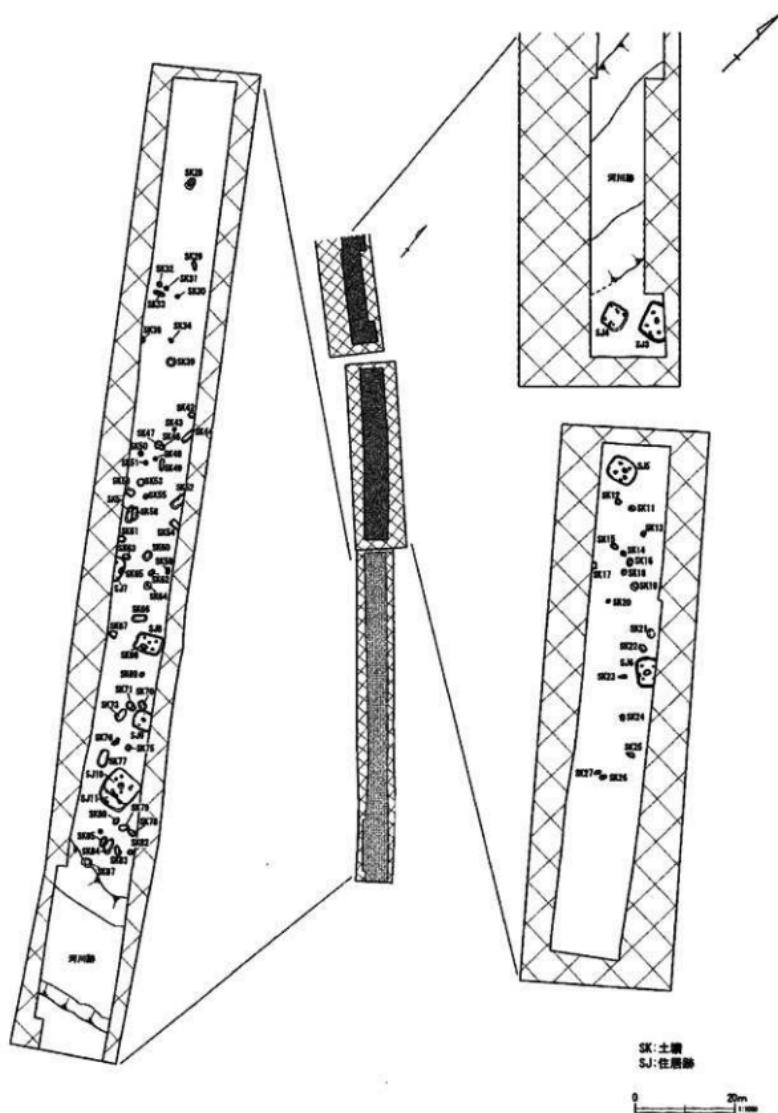
第三地区では、第134号土壙と第11号方形周溝墓が河川跡に沿って検出されている。河川跡から北西に90mほど離れたところに南北に延びる溝跡が検出されているが、それ以外は弥生時代中期の遺構は検出されていない。即ち、第II地区の南側を画する河川跡と第IV地区の北側を画する河川跡の間の約280m間はほぼ無遺構地帯である。この無遺構地帯を挟む遺構分布から、石川日出氏は池上・小敷田遺跡を北集落と南集落に分け分析し、北集落の成立時期は早いが、その後南集落が成立し両者が並存している（石川2001）。

無遺構地帯は微低地状を呈し、各時代を通じて遺構は少ない。また微低地の南部部分ではFA（棟名ニッケ火山灰）に被覆された水田跡が検出されている。またその下層の弥生時代中期の層からは、遺構は確認できなかったがブラントオパールが土壙から検出されている。

のことから弥生時代中期では同場所は水田として利用されていた可能性が高い。出土遺物の少ないとことからも裏付けられる。

第四地区（第4図）

第四地区は小敷田遺跡4区南端から5区中央部分までを範囲とする。検出された遺構は住居跡6軒、土壙42基である。遺構は地区を画する北側の河川跡付近に集中し、河川跡から離れるにつれ遺構の分布が希薄になる。この現象は第I地区及び第II地区と同様である。前二者と異なる点は地区を画する南側の



第3図 第II地区全体図

河川跡付近に遺構が全く見られない点である。第Ⅱ地区南遺構群と同様に住居跡と土壇が分布する箇所と土壇のみが分布する箇所に分けることができる。

住居跡と土壇が分布する地点は第18号住居跡と第179号土壇以北を指す。遺構同士に重複はあまり認められない。住居跡6軒に対して土壇は15基で他の地区に較べてやや少ない。これは第13・14号住居跡の周りに土壇がないことに起因する。他の住居跡の周りでは第Ⅰ・Ⅱ地区に同様であろう。

土壇のみが分布するのは第180号土壇以南の範囲が相当し、27基を数える。土壇同士にあまり重複は見られない。第Ⅱ地区南遺構群の土壇のみが分布する地点より分布は密ではない。また、土壇は3～4基が集まり一つの縦りを形成しているように見える。次章で土壇の分類を行うが、一番南側で検出されている第203～205土壇は平面形態4・5類に分類されるが、規模及び断面形態は他の土壇と趣を異にする。この土壇より南側では弥生時代中期の遺構は検出されていないことからも注目されるものである。このことについては後述する。

第IV地点も第Ⅱ地点と同様に住居跡と土壇が混合する地点と土壇のみの地点に分けられるがその境界を人口的な溝等によって区切ることはない。また第Ⅱ地区違って南側河川跡付近に住居を持たない。

第V地区

小敷田遺跡5区河川跡以南の範囲を指す。同地区は古墳時代前期以降多数の遺構が作られるが、弥生時代中期の遺構は皆無である。他の遺構から弥生時代中期の遺物が出土しているが、その量は微々たるもので後世の遺構により破壊されたとは考えにくい。ここでは同地区は弥生時代中期において積極的に遺構を構築しなかった地区と捉えておきたい。

以上のように第Ⅰ・Ⅱ・Ⅳ地区で弥生時代の遺構

が検出されている。いずれの地点からも多寡はあるが土壇が検出されている。つまり、この土壇の分析が池上・小敷田遺跡の性格を考える上で大きな割合を占めることになるだろう。そこで次に土壇についての検討を行う（註3）。

4. 土壇について

前述したように土壇をどのように捉えるかにより池上・小敷田遺跡の内容は大きく変わるであろう。第44・77号土壇のようにその出土遺物から積極的に墓壙と判断できるものもあるが、多くは出土遺物が少ないのでここでは土壇の形態分類を行うことで、ある程度の型を認識しその性格に迫ってみたい。

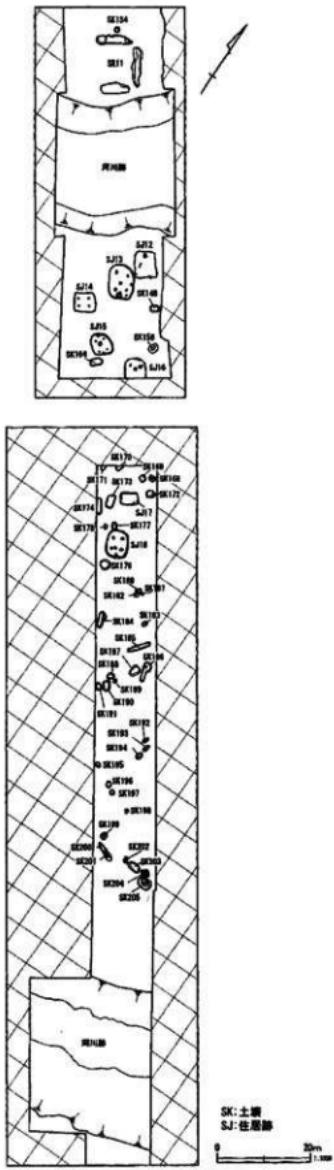
土壇に関しては、中島宏氏が報告書の中で平面形態を分類し多くは円ないし梢円形を呈すると述べている。また、規模の上からも、Aグループ（長径1.03～1.59m、短径0.79～1.21m）とBグループ（長径1.74～2.08m、短径0.88～1.28m）に2グループに多くが収まることを述べている（中島1984）。

平面形態や規模、深さは土壇の性格を考える上で重要であろう。ただし、平面形態は必ずしも相似形にはならない。特に土壇の上端は乱れているものが多く認められる。ここでは、平面形態を大まかに以下の6類に分類する。また、断面形態についても必要に応じてアルファベットを付し分類する。

a. 土壇分類（第5図）

1類 円形を基調とするもの。

総数は27基である。規模は径が1～1.5mの範囲にほぼ収まり、1.5mを超えるものはまれである。最大のものは、第179号土壇で径が2.15mである。断面形態は底面が平坦で緩やかに立ち上がるもの（a）、底面は平坦で立ち上がりが急なもの（b）、底面に平坦面を余り持たず、すり鉢状に立ち上がるものの（c）がみられる。a類が最も多く、b・c類は



第4図 第IV地区全体図

少ない。

2類 楕円形を基調とするもの

総数は20基である。長辺、短辺共に上端のラインが曲線状になるものを本類とした。そのため長軸と短軸の比率（以下長短比率）は、3類と変わらないものもあるが、概ねⅢ類に比べ低い。平均で1.39である。断面形態は1類同様にa・b・c類が認められる。第139号土壤は底面中央部分が盛り上がるもので他に類例は認められない。

3類 開丸長方形状を基調とするもの。

総數は49基である。長辺、短辺共に直線的になるものは余り見られない。長辺か短辺のどちらかが弧状になる。多くのものは短辺が軽く弧状を描く。また、四辺のうち一辺しか直線的でないものも本類とした。長短比率は平均1.67であり、2類に較べて細長く、規模も大きい。断面形態はa・b・c類が認められる。I・2類と異なりb類が数多く認められる。また、掘り込みが深いことも本類の特徴であろう。

4類 不整長方形を基調とするもの。

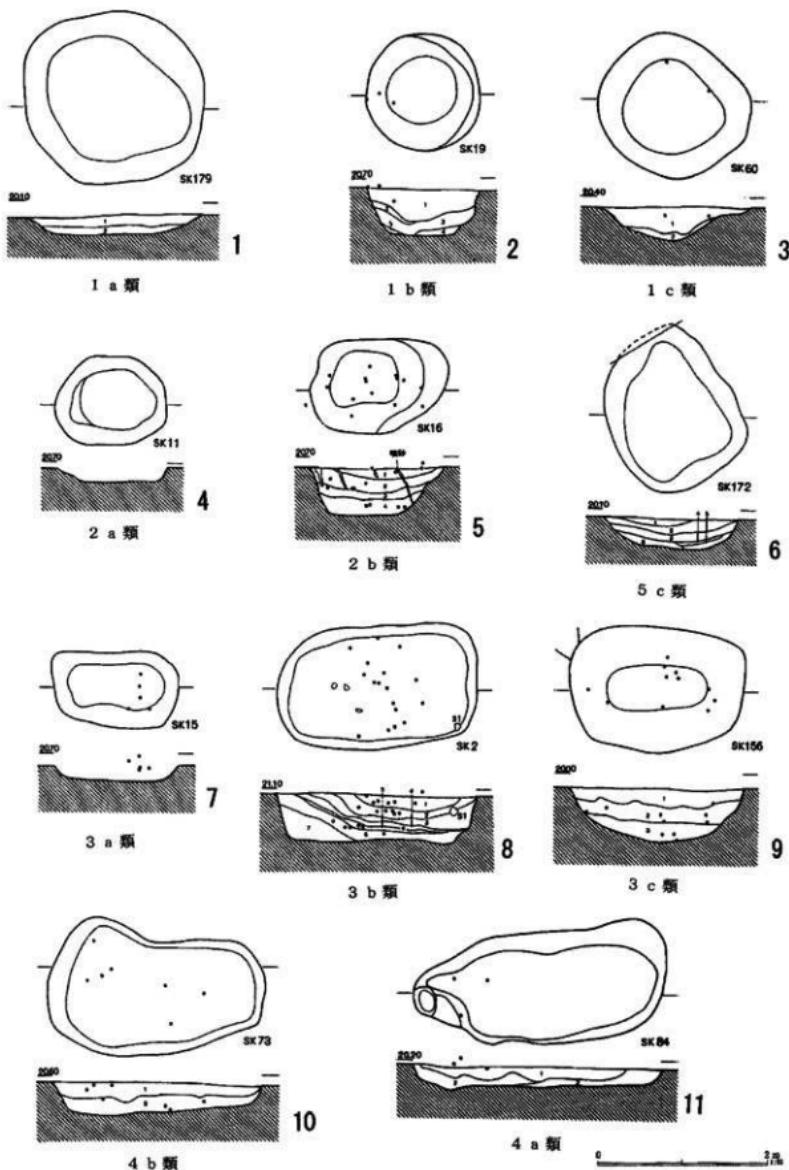
総数37基である。第6図からも分かるようにその多くは3類としたもと長短比率は変わらない。長辺、短辺共に直線的でないものが多く、不整橢円形と呼称したほうがよいかもしれない(註4)。しかし、長短比率が3類に近いことから不整長方形とする。断面形態はa・b・c類が認められる。また底面に凹凸もつもの(d)が一定量認められることが大きな特徴である。

5類 不整方形を呈するもの

総数は10基である。平面形態は円形及び橢円形が乱れたような形を呈する。本来的には1類から派生したものと考えられる。断面形態はa・b類である。

6類 ピット状のもの。

総数は、9基を数える。形態的には1類と相似形であるが規模が小さい。1類との規模の差が明確で



第5図 土壌分類

第1表 池上・小敷田遺跡地区別土壙数

	1類	2類	3類	4類	5類	合計
第I地区	4	6	20	7	0	37
第II地区	15	10	18	19	5	67
第III地区	1	0	0	0	0	1
第IV地区	7	4	11	11	5	38
合計	27	20	49	37	10	143

ないものあるが、ここでは径1m以下のものを6類とした。土壙というよりはピットと呼称したほうが適当であるだろう。このことから以後は、土壙からは除外する。

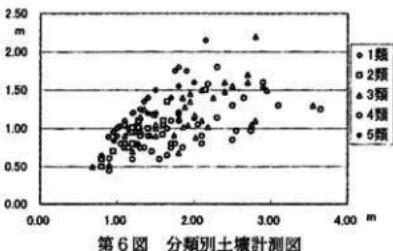
7類 溝状のもの。

共に第IV地区検出の第185・186号土壙の2基が相当する。5類と同様に土壙からは除外する。

6・7類を除いた土壙の数を表にしたのが第1表である。これを見ると3・4類の長方形を基調とするものが全体の6割を占める。更に2類を合わせると全体の7割以上である。つまり、長軸と短軸がはっきり分かれる形の土壙が大半を占めていると言う事ができる。また、2・3・4類の長軸は1mを超えるものが大多数を占める。2類は概ね、長軸1.1～1.6m、短軸0.8～1.1mの範囲に集中する。同一規格が存在するといえるほどの集中ではないが、他の類型に較べれば相対的に同規模のものが多いといえるであろう。梢円形という分類項目の故か、相似形のものが多い。

3類は、2類が集中する規模の範囲に分布が集中するものも見られるがそれ以外のものも多く認められる。2類に比べ長軸が長いものが多く、長短比率が高い。4類は2・3類に比べ分布にばらつきがある。

以上のような特徴がある土壙についていかなる性格が想定できるかが問題となろう。これら土壙を墓制に結び付けて考えたときに通常想定されるのは再



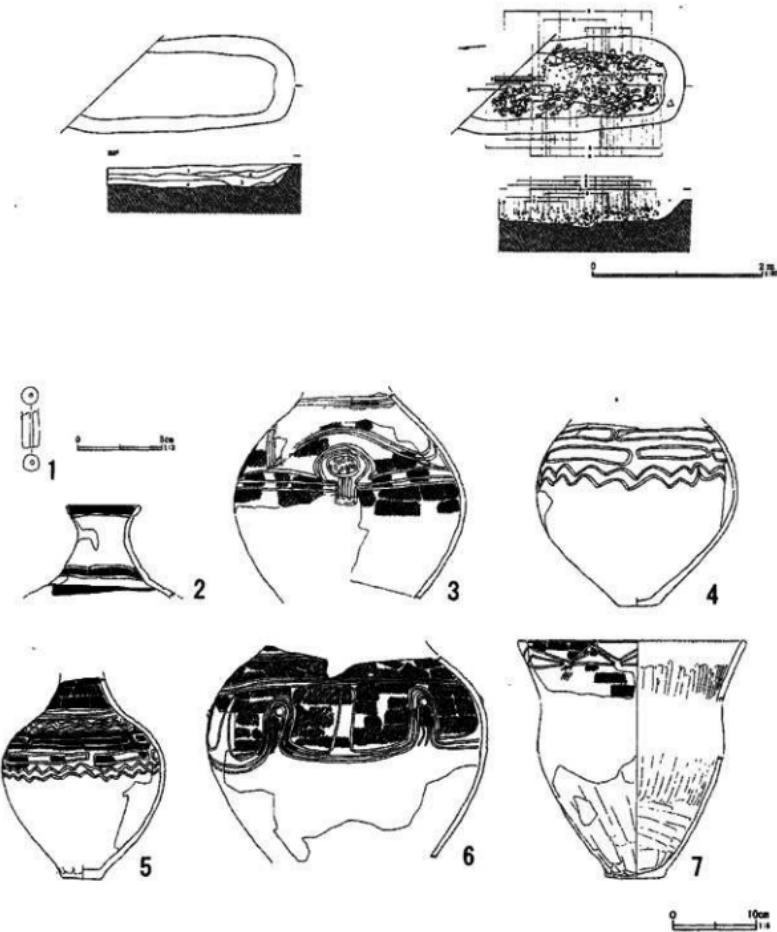
第6図 分類別土壙計測図

葬墓であろう。しかし、池上遺跡を報告した中島氏は通常再葬墓に見られる完形土器が出土しないことからも再葬墓とは明らかに区別されるものと考えている（中島1984）。

再葬墓は、明確に掘り込みを捉えるのは難しく推定によるものも多い。県内では近年、深谷市（旧岡部町）四十坂遺跡（鳥羽・今村2003）、熊谷市横間栗遺跡（鈴木1999）、同（旧妻沼町）飯塚南遺跡（荒川2004）、飯塚北（山本・細田2005）、春日部市（旧庄和町）須釜遺跡（長谷川・鬼塚2003）で良好な資料が報告されている。これらの例を見ると円形あるいは梢円形の平面形態を呈すものが多い。梢円形を呈するもの多くは長径が1m未満である。長軸が1mを超えるものは平面形態3類の飯塚南遺跡第1号再葬墓、須釜遺跡第6号再葬墓等がある。ただし、長軸1m未満のもの限れば須釜遺跡がほぼ方形を基調とする平面形態を呈する。

須釜遺跡は出土土器から一部池上・小敷田遺跡と並行すると考えられ、再葬墓のもっとも新しい段階に位置づけられる。地域的には下総台地上に立地するが、時期的に一番近い遺跡で土壙の平面形態が近似するのは興味深い。ただし、池上・小敷田遺跡で土壙の多数を占める2・3類と比べ、規模に違いが見られる。即ち、池上・小敷田遺跡では短径が1m超えるものが多数を占める。

出土土器の相違、土壙形態、規模の違いからもこ



第7図 小敷田遺跡第44号土壙及び出土遺物

れらのものを再葬墓と認識することはできない。次に土器が多数出土し、その遭構の情報が多い土壙を個別に取り上げ、見てみよう。

b. 第44号土壙の概要

第44号土壙は、第II地区南遺跡群の調査区端で検出され、土壙の北側は調査区外へ延び全形は分からぬが、検出された長さは、長軸2.80m、短軸1.10mである。平面形態は3類、主軸はほぼ南北方向で

深さは0.3mである。土壌底面は段差が認められるが概ね平坦で、壁は底面から内湾気味に緩やかに立ち上がる。土層は5層に分けられるが第5層を除き炭化物が検出されている（第6図上段）。

第44号土壌は前述のように、さまざまな平面形態を持つ土壌が纏まって検出されている箇所に位置している。土壌からは、数多くの土器と管玉が出土している。土器は、土壌の各層から出土しているが、完形近くにまで復元できる個体は、底面付近から多く出土している。土壌中央部分では破片資料が多く、土壌の壁際によった部分からの出土が多い。器種は壺と壺が見られる。残存率及び器種組成は壺に較べ圧倒的に壺が高い。

出土土器は、所謂池上式土器の範疇で捉えることができる。ただし地文に縄文を欠く土器や磨消縄文技法の採用など新しい様相が認められる。特に2は磨消縄文を用いた後に縄文部を赤彩している。池上・小敷田遺跡では、多くの弥生時代中期中葉の土器が出土しているが、縄文部を赤彩する土器は異系統土器を除きこれ以外に見られない。

当地域で池上式土器に後続する土器型式として、上敷免（新）・北島式土器が存在すると考えられているが、それらの土器の中には縄文部を赤彩する土器が見られる。特に北島式土器の標式遺跡である熊谷市北島遺跡では、破片資料も含めて報告書に掲載されている土器で赤彩されているものは199点を数える。このうち、無文部を赤彩するものは、小型壺・高杯など器面全体を赤彩するものを除きすべてが縄文部赤彩である。また、有文壺の地文を除く施文位置も口縁部直下に限られる。

未発達ながらも磨消縄文が見られる点（第7図2・3・5・6）、縄文部赤彩（2）、有文壺の施文幅の縮小（7）、北島式土器に特徴的な文様の萌芽的な要素が見られることから、第44号土壌出土土器

は、池上式土器でも新しい一群であろう。

土器のほかには欠損した管玉が1点出土している。残存長は2.1cm、径0.9cm、穿孔径0.1cmで両側から穿孔されている。故意に管玉を破損させたものかどうかは不明である。

c. 土壌の性格について

豊富な土器の出土、祭祀具及び装飾品と考えられる管玉の出土から、骨片などの直接的な証拠は欠くが第44号土壌を墓壙であると考えたい。同様に豊富な土器と管玉が出土した第77号土壌も同様に墓壙であろう。共に平面形態は3類である。これらのことから3類及び4類に属するものは同様に墓壙と考えてよいだろう。2類に関しても、3・4類に比べ長軸は短いものが多いが、成人層の埋葬にも十分な長さを持つことからも同様に墓壙と考えられる。

しかし、これらの土壌間に出土遺物の量に格差が見られる。多くの土壌からは、土器の破片が少量出土するに過ぎない。第44・77号土壌のように管玉を伴うのは寧ろ例外である。ここでは、生前の集落内での地位が反映し土壌に格差が生じたと考えておきたい。検出された土壌の総数における希少性からも、集落の一般成員とは、やや異なる地位にあった人物の墓壙と思われる。

埋葬にあたり、木棺に納められたか、直葬であったかは墓壙の出自や伝播を考える上で重要であろう。前中西遺跡では、木棺墓が検出されている（吉野2003）。棺材は確認されていないが、小口板をはめ込んだと考えられる痕跡から組合せ式の箱式木棺墓と推定されている。

池上・小敷田遺跡では土壌底面にこれらの痕跡は認められない。土壌底面は、先に分類したように各類型で断面形態a・b類が主体を占め、平坦である。幅、長さから言っても木棺を安置する広さは十分で

ある。しかし、第44号土壙に見られるように土器の出土位置が土壙上面にのみ集中することはない。第57・77号土壙のように確認面付近にのみ遺物が集中するものも見られるが底面との間に木棺を安置する幅はない。また、覆土の状況からも木棺が存在した可能性は指摘できない。

これらのことから、ここでは木棺を用いない、直葬と判断したい。

I類及び5類のように長軸と短軸の比率が同じあるいはそれに近いものについてはどうであろうか。大きさ、平面形態の上からも池上・小敷田遺跡に先行する時期の再葬墓の土壙に近いものが多い。他の土壙と同様に出土遺物も少なく手がかりが乏しい。ここでは、他の類型同様に墓壙と考えておきたい。

第IV地区の概要を述べてときに、第203～205号土壙の特異性について触れた。前述のように集落の南端にあたる場所で土壙が検出されている。平面形態は4・5類であるが、規模、断面形態からも特異なものである。第IV地区からは、北陸地方の小松式が住居跡から出土し、第203号土壙からも出土している。他地区では第1号方形周溝墓で出土しているが、多くは第IV地区でまとまっている。

集落の南端に位置することと、他地域の土器がまとまって出土することから、ここでは、墓壙以外のものと考えておきたい。

5.まとめ

以上のように、池上・小敷田遺跡の土壙に検討を加えその性格について考えてきたが、最後に周辺遺跡との違いなどに触れ終わりとしたい。

上敷免遺跡では池上・小敷田遺跡に後続する住居跡が調査されている（滝瀬・山本1993）。小敷田遺跡同様に道路幅の調査であり、遺跡の全体像は不明である。調査された4軒の住居跡周辺には土壙は見ら

れない。上敷免遺跡は他時期の遺構も数多く存在するが、幸いにも弥生時代の住居跡周辺は遺構の密度が薄い。このことから住居跡周辺にはもとから土壙などの遺構はなかったのであろう。

北島遺跡では第19地点で北島式期の集落の全貌がほぼ明らかになっている（吉田2003）。78軒の住居跡に対してほぼ同数の79基の土壙が検出されている。土壙は数こそ少ないが池上・小敷田遺跡同様に住居跡に囲まれるようにして検出されている。第209号住居跡廃絶後には土壙が10基築かれている。これらの土壙の中には土器棺を伴うものがみとめられ、住居内からも同様な埋設土器が認められる。

北島遺跡の集落を分析した松岡有希子氏は、水路を挟んだ西側に屋内土器棺のみ、東側には屋外土器棺のみが設置されるという偏在性を指摘した（松岡2003）。柿沼幹夫氏は北島遺跡の土壙、屋外土器棺、屋内土器棺について検討を加えている（柿沼2004）。骨片、土壙の集中から3群の土壙を成人層の墓壙として認識し、屋外土器棺は幼児、屋内土器棺は胎児の埋葬施設と結論付けた。

松岡・柿沼両氏とも、これらの墓壙のほかに、方形周溝墓などの墓域が存在すると推定している。住居数に対する土壙の少なさから言っても他に墓域が存在すると思われる。ただし、その墓域が方形周溝墓を主体とするかは不明である。

なぜなら、先に見てきたように豊富な土器を出した第44号土壙は池上・小敷田遺跡の中でももっとも新しい土器群で、第I地区方形周溝墓出土土器よりも後出する。つまり、方形周溝墓導入後も土壙墓が築かれていたのである。

池上・小敷田遺跡では、土壙墓は住居跡周辺に築かれるものと、溝などで区画されることはないが第II地区のように土壙墓が集中する箇所が認められる。一方、北島遺跡では、住居跡の数に対して少數であ

るが、住居跡の周辺に土壙墓が認められる。しかし、第209号住居跡周辺に築かれた土壙墓以外に集中する箇所は認められない。同様に上敷免遺跡でも住居跡周辺に土壙墓群は認められない。このことは、池上・小敷田遺跡第II地区で認められた、萌芽的な土壙墓群の集中分布が、上敷免、北島遺跡を通じて集落域との分離が図られ、より明確に墓域が形成されるという流れで理解する必要があろう。

また、第44号土壙に代表されるように他の土壙墓に比べ、厚葬された例がある。このような厚葬が生前の地位の反映であると仮定すれば、いかなる地位にある人物か、方形周溝墓の被葬者ともに問題となる。今後の課題としたい。

なお、本稿は平成15年度埼玉県埋蔵文化財調査事業団研究助成の成果の一部である。

註

- (1) 調査された4箇所の河川跡については、報告者の吉田氏より、北から南に流れる同一のものと想定されている(吉田1991)。これに対して小出輝雄氏は、「遺跡周辺が「荒川脛状地の末端部分に位置するため河川は西から東に流れるのが一般的である」と記している(小出2006)。頓聴すべき意見であり、今後検討する必要があろう。ここでは、自然地形と遺構の配置を考えることを第一義とするため報告書の記載に拠った。
- (2) 後述するように小敷田遺跡3区において弥生時代中期層からプラントオバールが検出されている。
- (3) 池上遺跡と小敷田遺跡の土壙には別々に第1号から番号がつけられている。ここでは混亂を避けるため、土壙数の多い小敷田遺跡に関してはそのまま第○号土壙と呼称し、池上遺跡の土壙を呼称する場合は池上第○号土壙とする。
- (4) 小敷田遺跡の土壙の分類では不整橢円形あるいは長橢円形という言葉が使われている(吉田1991)。

参考文献

- 荒川 弘 2004 「飯塚南遺跡」 埼玉県妻沼町教育委員会
- 石川日出志 2001 「関東地方弥生時代中期土器の社会変動」『駒台史学』第113号 pp. 57~94
- 甲斐博幸 1996 「常代遺跡群」 箕郷都市文化財施セントラル発掘調査報告書第112集
- 柿沼幹夫 2004 「北島遺跡の墓制に関する観察」『埼玉県立博物館紀要』第29号 pp. 29~42
- 栗原文藏 1976 「平戸遺跡」『埼玉土器集成4 織文晩期末葉~弥生中期』pp. 18~19 埼玉考古学会
- 金子彰之 1988 「埼玉県における弥生墓制の展開」『東日本の弥生墓制~再葬墓と方形周溝墓』pp. 380~382 群馬県考古学研究所・千曲川水系古代文化研究所・北武藏古代文化研究会
- 與地英夫・河合英夫 1997 「中里遺跡第III地点発掘調査報告書」小田原市文化財調査報告書第61集 小田原市教育委員会
- 小出輝雄 2006 「標漢は戦争用遺跡か—南関東弥生時代中期後半の検討からー」『古代』第119号 pp. 57~77
- 板本和俊 1988 「東日本弥生墓制研究の問題点」『東日本の弥生墓制~再葬墓と方形周溝墓』pp. 739~743 群馬県考古学研究所・千曲川水系古代文化研究所・北武藏古代文化研究会
- 鈴木孝之 2004 「古宮/中条条里/上河原」 埼玉県埋蔵文化財調査報告書第298集
- 鈴木敏昭 1999 「横間栗遺跡」 埼玉県熊谷市教育委員会
- 滝瀬芳之・山本 靖 1993 「上敷免遺跡」 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第128集
- 鳥羽政之・今村直樹 2003 「四十坂遺跡」岡部町遺跡調査会埋蔵文化財調査報告書第11集 岡部町遺跡調査会
- 中島 宏 1984 「池上・池守」 埼玉県教育委員会
- 長谷川清一・鬼塚知典 2003 「須釜遺跡」庄和町文化財調査報告書第9集 埼玉県庄和町教育委員会
- 春成秀爾 1993 「弥生時代の再葬墓」『国立歴史民俗博物館研究報告』第49集 pp. 47~91
- 福田 駿 2004 「方形周溝墓と土器Ⅱ~概観その1~」『研究紀要』第19号 pp. 133~168 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

- 山本 槟・細田 勝 2005 「坂塚北遺跡！」 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第306集
- 宮 昌之 1983 「池上西遺跡」 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第21集
- 松岡有希子 2003 「北島式と集落」『シンポジウム北島式とその時代－弥生時代の新展開－』埼玉考古別冊7 pp. 47～68 埼玉考古学会
- 吉田 稔 1991 「小敷田遺跡」 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第95集
- 吉田 稔 2003 「北島遺跡VI」 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第286集
- 吉田 稔 2003 「北島式の提唱」『シンポジウム北島式とその時代－弥生時代の新展開－』埼玉考古別冊7 pp. 3～36 埼玉考古学会
- 吉野 健 2001 「隅防木遺跡」 熊谷市遺跡調査会埋蔵文化財調査報告書 熊谷市教育委員会
- 吉野 健 2002 「前中西遺跡Ⅱ」 平成13年度熊谷市埋蔵文化財調査報告書 熊谷市教育委員会
- 吉野 健 2003 「前中西遺跡Ⅲ」 平成14年度熊谷市埋蔵文化財調査報告書 熊谷市教育委員会

研究紀要 第21号

2006

平成18年6月20日 印 刷

平成18年6月27日 発 行

発 行 財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

〒369-0108 熊谷市船木台4-4-1

電 話 0493-39-3955

<http://www.saimabun.or.jp>

印 刷 誠美堂印刷株式会社